昭島礼拝 2020/4/5

聖書：マルコ 15:22-32
主題：他人を救うイエス様の十字架
賛美：

みなさん、おはようございます。今日は棕櫚の日曜日という日になります。イエス様がロバの子に乗って、エルサレムの町に入られた日です。この棕櫚の日曜日から受難週になります。今週金曜日の朝、イエス様は十字架に架けられて殺されます。しかし 3 日目の朝、日曜日の朝復活されます。来週はイースターです。今週一週間、イエス様の十字架を覚えて過ごしましょう。そこで今日はイエス様が十字架に架かられた時のお話を開いて頂きました。イエス様が十字架に架かられたのは、私たちすべての人を罪から救うためです。イエス様の十字架によって私たちは罪赦され、神様と和解し、神の国へと入ることができます。イエス様の救いを感謝します。

今日はマルコの福音書 15 章を開いて頂きました。1 つ前の 14 章には、イエス様と弟子たちの最後の晩餐、そしてオリーブ山で祈るイエス様、そこでイエス様は逮捕されて、裁判にかけられ、十字架刑が決まるという事が書かれています。イエス様には何の罪もありませんでした。イエス様の裁判では、イエス様に不利な証言をする人がたくさん現れましたが、どれも証言が一致しなかったと 14 章に記されています。当然と言えば当然かもしれません。イエス様は何も悪いことはしていないのです。イエス様が死刑に値するという決め手になった大きなことは、イエス様が自分を神様と同じと言ったことです。マルコ 14:61-64 を読みます。『しかし、イエスは黙ったまま、何もお答えにならなかった。大祭司は再びイエスに尋ねた。「おまえは、ほむべき方の子キリストなのか。」 62　そこでイエスは言われた。「わたしが、それです。あなたがたは、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」 63　すると、大祭司は自分の衣を引き裂いて言った。「なぜこれ以上、証人が必要か。 64　あなたがたは、神を冒瀆することばを聞いたのだ。どう考えるか。」すると彼らは全員で、イエスは死に値すると決めた。』大祭司がイエス様に「おまえは、ほむべき方の子キリストなのか」と尋ねると、イエス様はそれを認めました。「ほむべき方」という言葉は神様を指す言葉です。神様は賛美されるべき方、栄光を受けるにふさわしいお方です。詩篇を読むと、そのような言葉がたくさんあります。そして聖書には、神様を冒涜する者は死に値すると書かれています。人間が自分のことを神と同じだという事は、神様を冒涜していることになります。それでイエス様は死刑に値するとされました。

しかしイエス様がご自分のことを、ほむべき方の子キリストと告白するのは、間違っていません。イエス様は確かにそのようなお方なのです。神様であられ、栄光を受けるにふさわしいお方です。しかし同時に 100%人間でもあられ、大祭司たちの目にはどう見ても人間にしか見えないのです。大祭司たちはイエス様が神様であり、救い主であると認めることは出来ませんでした。大祭司たちは大きな勘違いをしているのですが、真理を言い当てているのです。もしかしたら、イエス様はこの裁判の場で、ご自分が神様であるという動かぬ証拠を提示する事ができたかもしれません。どんなことでもできる神様ですから、それくらいのことは出来たはずです。神様としての栄光を目に見える形でお示しになれたはずです。しかしなさいませんでした。それは以前にも一緒に見ましたが、イエス様の栄光とは、賛美、栄光を受けるにふさわしい神様としての力強さ、威厳もそうですが、十字架と復活もそうだからです。イエス様の神様としての栄光、救い主としての栄光は、確かにこの裁判の後に現わされています。

イエス様の裁判は真夜中に始まり、夜明け前には終わりました。現代で行わ

れれば、とても不当な裁判です。しかしイエス様は何も仰らず人々の決定に従いました。そしてゴルゴタという場所に連れていかれて、十字架に架けられます。イエス様の十字架の上には罪状書きとして、「ユダヤ人の王」と書かれていました。二人の犯罪人も一緒に、イエス様の右と左に十字架に架けられました。十字架刑はさらし者にされる死刑です。手と足に釘を打たれて、木に磔にされます、そしてじわじわと死んでいきます。道行く人々は、十字架に架けられている犯罪人を見て、イエス様をののしり、嘲りました。死に向かって行く苦しみや、人々からののしり、あざけりをじっとイエス様は耐えておられました。

祭司長や律法学者たちのあざけりの言葉が 15:31-32 に記されているので、読みたいと思います。『同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒になって、代わる代わるイエスを嘲って言った。「他人は救ったが、自分は救えない。 32 キリスト、イスラエルの王に、今、十字架から降りてもらおう。それを見たら信じよう。」また、一緒に十字架につけられていた者たちもイエスをののしった。』祭司長、律法学者たちはこのように言いました。「他人は救ったが、自分は救えない。」これまでイエス様はたくさんの病人を癒し、悪霊に着かれた人から悪霊を追いだしました。多くの人を奇跡をもって助けて、救ってきました。そのような話は祭司長たちや律法学者たちも聞いていました。だからこのように言ったのでしょう。他の人々を奇跡によって救うことは出来ても、そのような力を持ってはいても、自分を救う事ができないなら、そんなものは本当に神の力なのか？と言いたいわけです。本当に神様ならば、いとも簡単に十字架から降りてこれるはず。だから降りて見せろというわけです。しかしイエス様は十字架から降りませんでした。それは降りる力が無いからではなく、降りてしまったら私たちを救う事ができないからです。降りてしまったら、このあざけっている律法学者たちを救う事ができないからです。もしこの時、イエス様が十字架から降りていたら大変なことになっていましたね。

ですから祭司長、律法学者たちの言葉は少し修正しなければいけないでしょうね。「他人は救ったが、自分は救えない」のではありません。イエス様は「他人を救うために、自分を救わない」という選択をされているのです。まさに自己犠牲の愛です。イエス様の愛は、自分のいのちを犠牲にして、他の人を救うという愛なのです。この他人という言葉の中に私たちすべての人が含まれています。愛という言葉を用いているのですから、もはや他人ではないですね。イエス様の愛する人です。イエス様の愛する私たちを救うために、イエス様は十字架から降りませんでした。これこそがイエス様の神様としての栄光の現れです。このような愛は神様以外に持ち合わせていないのではないでしょうか。誰かのためにいのちを捨てる事ができる、それも十字架というとても大きな苦しみを伴う死です。祭司長、律法学者たちは、イエス様に神様としての力の表れとして十字架から降りて見せろと言いました。神様の栄光を現してみろということです。イエス様は祭司長、律法学者たちの思いとは違う方法で、神様としての栄光を現されているのです。彼らはそれに気づいていません。

マルコの福音書に描かれているイエス様のお姿は人々に仕えるお方でした。マルコ 10:43-45 でイエス様はこう仰っていました。「しかし、あなたがたの間では、そうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。 44 あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。 45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」イエス様はご自身のこのお言葉どおり、神様であられましたけれども、人々に仕えられ、そしてご自分のいのちを捧げて下さいました。イエス様がご自分のいのちを十字架で捧げて下さったので、私たちは罪を赦されました。私たちの罪の刑罰をイエス様が代わりに背負って下さったのです。イエス様には何の罪もありませんでしたが、私たちが自分の罪によって滅びてしまうのを黙って見過ごすことができず、救いの道を備えて下さったのです。

そしてそのようなご自身のお姿を示すことで、私たちに神様の愛の深さを教えてくださいました。神様の愛は自分のいのちを他の人のために差し出す愛です。犠牲愛です。私たちはそのような愛は持ち合わせていないかもしれません。しかし悔い改めて、イエス様の愛を受け取る時、私たちはイエス様の愛で満たされます。そうしてイエス様のように他の人を愛する事ができるようになります。私たちにそのような人になって欲しいからこそ、イエス様は十字架で贖いのわざ、救いの業を成し遂げて下さったのです。

今週一週間、共にイエス様の十字架の愛を共に受け取らせて頂きましょう。そのお苦しみは私の為であったと素直に受け取り、そして自分の罪深さを悔い改め、神様の愛で満たして頂きましょう。